

「安息日の主」—マタイによる福音書講解説教 55—

ホセア書
マタイによる福音書

第6章 6節
第12章 1節～8節

説教 岡村 恒牧師

「人の子は安息日の主である」。(マタイによる福音書 第12章8節) 主イエス・キリストがおっしゃった言葉を聴きました。

当時のユダヤ人にとって大切な礼拝の日は金曜日の日没から土曜日の日没にかけての安息日でした。金曜日の日没が来ると、律法の定めに従って、様々なことを中断しました。元をたどると十戒にたどり着きます。ユダヤ人がエジプトで奴隷であったとき、神はモーセを遣わし、エジプトから解放なされました。モーセは、神から10の戒めを与えられた中で、「安息日を覚えて、これを聖とせよ。」(出エジプト記 第10章8節) という戒めがあります。後に640もの戒めができたと言われます。しかし、私たちは聖書を読み、礼拝する中で、神の前で本当の安息を得ることが出来ると聖書は語ります。

今日でも保守的なユダヤ人はこの戒めを厳密に守ろうとします。日常生活の隅々にまで、これは労働に当たるか当たらないかを考えます。何のためでしょうか。神は「光あれ」といわれて6日間をかけて天地の全てと人間をお創りになり、満足してご覧になって7日目は休みの日とされました。それゆえ、人も7日目を安息の日として、神を思い、神を拝み、神のために1日を使うようにしよう。それが十戒の本来の姿でありました。一番大事なのは神の満足、喜びだったのです。神はそのために、律法をお与えになり、安息日をお定めになりました。

この日、主イエスの弟子たちは畑を歩いていました。弟子たちは貧しい者に許されている仕方で、麦の穂を摘んで頬張ります。そしてそれをパリサイ人が見ていました。この人々は律法を厳密に守るということに命をかけていた人です。他の人々と自分たちは違うという事を誇りに思い意識をしていました。

当時の律法学者やパリサイ人は神の本来の意図を見失っていたようです。神と自分の関係よりは、自分と他の人々との関係に目が留まりました。パリサイ派の人々は歩きながら麦の穂を摘む主イエスの弟子たちを見て、腹を立てます。それは収穫の労働でした。主イエスはユダヤ人が誇りにするダビデ王の物語を引用して、安息日が本来どういうものかお語りになりました。

ダビデ王が従者と一緒に歩んでいた時に空腹

になります。そして神殿に行って祭司以外が食べはならぬパンをもらって食べたという逸話が記されています。重大な律法違反です。神との関係を喜びながら生きることが十戒の律法の目的であり、神の願いだと言われます。あなた方が尊敬し誇りにするダビデ王でさえ祭司のパンを食べたのです。神が律法をお与えになり、人々をご自分の祝福のうちにおいて守り導こうとされたことが、聖書を読めばわかります。私たちが律法を守れば本当の安息が与えられるなどとは言われていません。まず神が、私たちを憐れみ愛してくださり、そして神の祝福と安息を与えようとおっしゃってくださったのです。

主はいろいろな例え話をして、神の喜びを語られました。主イエスは言われました。「人の子は安息日の主である」。この言葉は、パリサイ人の誤解を打ち砕く言葉でした。私たちの思い違いを突破する言葉です。私たちが神に近づいていくのではない。主イエスが、ご自分の命を代償にして、神の元に帰ることのできない私たちをつれ戻し、赦しを与え、神の祝福を与えてくださる。この宣言でありました。

終わりの日、主イエスが地上に来られ、新しい天と新しい地が完成します。神はその時、安息日の喜びをもっと大きなスケールで、完全な仕方であられるというのです。誰でも主イエスを救い主と信じるなら、神との本当に深い絆に入れられる。この聖書の約束を信じる者は、新しい天と新しい地が到来するとき、神の国の食卓に着いて、神の安息を共に味わうようになります。主イエスは、この約束を実現するために十字架にお架かりになりました。

神を信じ、主イエスを信じる者はもはや滅びることはない。聖書は宣言します。神が与えてくださる安息は、全身全霊、魂全体が神の喜びの中に包み込まれる安息です。終わりの日の安息が豊かで確実なので、私たちはこの地上を希望を持って歩みます。終わりの日の完成を目指して歩むことができます。少しでも多くの人が喜びの中に包み込まれるように祈りながら歩むことができます。私たちは、終わりの日の安息を心待ちにしながら、今日与えられている喜びを味わいながら新しい歩みに進み出しましょう。

(記 説教要約奉仕者)